

質の高いコミュニケーション能力の育成

ーアクティブ・ラーニングを取り入れた授業実践を通してー

上原明子* 浦崎多恵子* 山本耕司* 大城賢**
*琉球大学教育学部附属中学校 **琉球大学教育学部

I 主題設定の理由

1 社会的背景から

昨今の急速な技術革新やグローバル化が進む中、国際共通語である英語力の向上は日本の将来にとって極めて重要な課題である。また、これからの成熟社会において、日本特有の価値を海外へ発信することや、多様な価値観の中、厳しい交渉を勝ち抜く人材育成の観点から、英語教育の果たす役割は、大きいと考える。

文部科学省は、小・中・高を通じた新たな英語教育の改革を順次実施できるように「今後の英語教育の改善・充実方策について 報告 ～グローバル化に対応した英語教育改革の5つの提言～」を示し、児童・生徒の英語力の向上について、具体的な方策を提案している。

また、中教審教育課程特別部会「論点整理」においては、思考力・判断力・表現力をはぐくむときに、深い学び・対話的な学び・主体的な学びでの授業改善が大切だとされている。

さらに、小学校での教科化を見据え、小中連携を継続的に行い、小学校で学んだ表現等を繰り返し使うなどして、中学校ではそれらの表現等の定着を図る必要がある。

2 これまでの研究から

本校英語科では、「協調学習を通したコミュニケーション能力の育成ー『知識構成型ジグソー法』を取り入れた授業づくりー」というテーマで研究を進めてきた。

研究の成果としては、より良いコミュニケーション能力の獲得を求める際、生徒自身に考えさせ答えを生み出させるために知識構成型ジグソー法を活用

することが有効であると分かった。また、生徒が課題に対する解を出しその解を共有することで、様々な見方や考え方があることに生徒が気づくことができた。(1)

仲間と対話を通して理解を深めることで、よりよい解へ近づくことができるという学習の風土(文化)がはぐくまれつつあることは、3年間の研究の成果と言える。

課題としては、英語での表現力のより正確な運用能力が必要であることと、伝える内容と的確な表現が伴った質の高いコミュニケーション能力を身につけさせるために、知識構成型ジグソー法以外の手法の検討(1)が挙げられた。知識構成型ジグソー法は、言語習得の際に必要な要素である「思考を深める」という点では有効だった反面、もう一つの要素である「英語でのコミュニケーション」においては、課題となった。

そこで、今年度から取り組む研究は、知識構成型ジグソー法だけでなく、ペアやグループでのスピーキング活動やライティング活動などのアウトプットを組み合わせる等の工夫をすることで、日々の授業でコミュニケーション活動の充実を図り、表現力や正確な運用能力も身につけさせたいと考える。

そのために、アクティブ・ラーニングを取り入れた授業実践を通して、質の高いコミュニケーション能力の育成を目指す。

II 本研究の目的

アクティブ・ラーニングを取り入れた授業実践を通して、質の高いコミュニケーション能力の育成を図ることを目的とする。

Ⅲ 目指す生徒像

内容のつながりを意識して、自分の考えや気持ちを、場面や状況にふさわしい表現を用いて伝えることができる生徒

英語科では3年間を通じて上記のような生徒の育成を目指し、アクティブ・ラーニングを取り入れた授業実践を行っていききたい。最終的には、学習者がコミュニケーションの大切な要素に気づき、英語で伝え合うことができるようになることを目指す。

Ⅳ 研究内容

1 研究計画

3年間の研究を以下のように計画している(表1)。研究1年次の今年度は、理論研究及び授業づくりに重点を置き、研究を進める。

表1 3年間の研究計画

1年次	<ul style="list-style-type: none"> 英語科における「思考力」の定義 「質の高いコミュニケーション能力」の定義 アクティブ・ラーニングを取り入れた授業実践の検討
2年次	<ul style="list-style-type: none"> アクティブ・ラーニングを取り入れた授業実践の見直し 中学校3年間を見通したカリキュラム作成 学習評価の検討
3年次	<ul style="list-style-type: none"> アクティブ・ラーニングを取り入れた授業実践の充実 本研究のまとめ

2 英語科における「思考力」「質の高いコミュニケーション能力」

質の高いコミュニケーションには、既習の知識を使った情報伝達だけではなく、相手を意識し、相手のことを理解する(考える)が必要になる。つまり、「思考力」が質の高いコミュニケーションの基盤になると考える。そこで、本校英語科として「思考力」及び「質の高いコミュニケーション能力」の捉え方を、以下のようにまとめた。

(1) 「思考力」とは

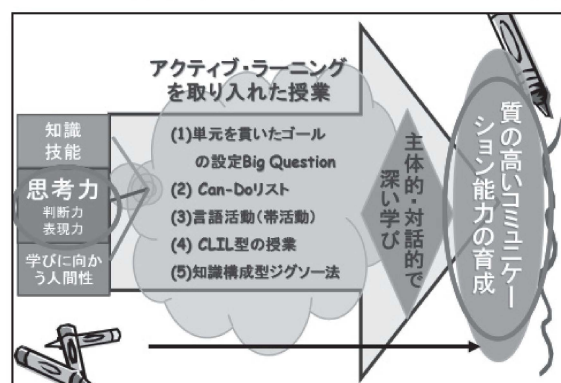
- 相手の気持ちや背景を理解し、場面や状況にふさわしい表現を考える力
- 自分の考えや気持ちを、相手に伝わるように論理的に考える力

(2) 「質の高いコミュニケーション能力」とは

教育課程部会外国語ワーキンググループは小・中・高等学校を通じた外国語教育のイメージ(案)(平成28年4月26日)の中で、「中学校においては、外国語やその背景にある文化を尊重し、聞き手・読み手・話し手・書き手に配慮しながら、簡単な情報や意見交換ができる資質・能力を育成する⁽²⁾」ことと述べている。相手意識をもったコミュニケーション能力を育成し、外国語でのコミュニケーションを通して相手の意見を聞き、さらに相手に分かりやすく論理的に自分の考えを伝えるという資質・能力の育成が求められていると考える。

そこで、本校英語科では、前述の「思考力」を基盤に、場面や相手との関係を理解して適切に表現できる力を身につけ、他者とのより良い関係を築いていく力を、質の高いコミュニケーション能力と捉えている(図1)。さらに英語科で培った質の高いコミュニケーション能力が、今後、社会へ出たときに求められる「前に踏み出す力」「考え抜く力」「チームで働く力」⁽³⁾の基礎となり、21世紀を豊かに生きていくための発展持続可能な力へ繋がると期待する。

図1 「思考力」「質の高いコミュニケーション能力」



3 アクティブ・ラーニングを取り入れた授業実践の柱

本校英語科では、質の高いコミュニケーション能力を育成するために、既習の知識・技能を生かして、より良い解に向け思考を活性化させる活動を、アクティブ・ラーニングと捉える。今年度は、思考の活性化を促すために5つの柱で授業実践を行うこととした。他者と協力して学習することで自分の考えをさらに深め、より良い解を見つけ表現(書く、やりとり、発表する)することに繋げたい。

(1) 単元を貫いたゴールの設定 Big Question⁽⁴⁾

目標（～できる）から逆算した授業設計。単元全体を見通した学び、課題の設定を行う。答えがすぐには出せないオープンクエスチョンにすることで、「問い」の答え（解）を考えながら、能動的に授業を受け、主体的な学びにつながる。石井（2015）は、『『使える』レベルの思考を促す課題は、単元末あるいは複数の単元を総括するポイントで取り組むようにするのが現実的かつ効果的⁽⁵⁾』であると、述べている。Big Question をプログラムを通して黒板に掲示し、生徒はその答えを考えながら授業に臨む。授業の中で生徒は毎時間情報を蓄積しつつ自分の考えを深めていく。単元の最後には、「問い」の答え（解）を表現発表する活動を行い、評価につなげる。ここでは、思考を促すような Big Question 「問い」の設定が重要になる。「思考力を育てるには、考えなくなる状況や深く思考する必然性をどう創るかがまずは重要⁽⁶⁾」なのである。そこで、本校英語科では、例えば下記（表 2）のような単元を貫く Big Question を設定し、授業設計を行っている。

表 2 Big Question の例

1 年	Pro2: 外国から転入生が来たら、どう声をかける？ Pro3: 自己紹介で伝えたいことは何？ Pro7: 相手をよく知るための質問の工夫は？
2 年	Pro1: ある程度まとまった文章の書き方とは？ Pro2: 夏休みの予定をコメントを入れて書いてみよう。 Pro3: 自分たちができるチャリティーとは？
3 年	Pro3: The 5s でできることベスト 1 Pro7: What is the most important thing to you? Pro8: What is the best energy source?

現実社会に置き換えられるようなリアリティのある状況を設定することで、Big Question で与えられた課題を「自分ごと」として捉え、思考する必然性が高まる、と考える。

(2) Can-Do リスト

Big Question と連動したものとして設定する。また、アクティブ・ラーニングを意識した内容とする。例えば、「○○について説明することができる」や「○○に対して自分の意見を言う」等のように、生徒同士が意見を重ねることができるよう目標設定の工夫をする。脳の中（思考）がアクティブな状態になるような目標設定が大切だと考える。教科書の言語材料をマスターすることが授業の柱ではなく、単元

の最後に、学年末や卒業時に、「英語を使ってどんなことができるのか」という観点のもと、「授業の中で英語を使って何かができるような場面を設定する必要⁽⁷⁾」がある。さらに、毎時間の Can-Do をチェックシートでの振り返りを重ねていくことで、Big Question への解に向かってスモールステップを積み重ねていくことになる。

(3) 言語活動（帯活動）

既習事項の定着やチャレンジングな内容に取り組ませるためには、帯活動が有効である。各課の下地作りだけでなく、スパイラル的に学習を進めていくので、つきたい力をはぐくむのに必要な活動をスモールステップで行うことができる。授業の始めの 10 分程度の短い時間で行い、英語での発信力を高め、かつ人間関係をよくする言語活動を取り入れると効果的だと考える。

本校英語科で取り組んでいる帯活動の 1 つに「MP3=Mission Possible 3」がある。教師から出題されたトピックについて、3 人と 1 分間会話を続ける活動である。1 回目はとなりペア、2 回目は前後ペア、3 回目はななめペアと組み、会話を楽しむ。間違った英語を使っているかもしれないが、同じトピックで 3 回会話をすることで、相互の学びが生まれ、1 回目よりは 3 回目の会話が、より質の高いものに近づくと考える。また、コミュニケーションの楽しさを体験し、相互理解も深まる総合的な言語活動でもある。

(4) CLIL 型の授業

さまざまな教科の内容と言語との両方を合わせて学ぶ学習方法である。英語の知識と技能だけでなく、例えば家庭科や社会科、総合的な学習の時間や国際理解教育など、他教科（領域）の知識を活用し、実社会や実生活につながる内容を英語で考えるという学習過程は、生徒の思考を活性化させると考える。今年度は、各学年、1 教材を CLIL の指導法を取り入れた実践を行う（表 3）。

表 3 CLIL 型授業の案

1 年	バランスの良い朝食（家庭）
2 年	落語について英語で紹介しよう（国際理解）
3 年	地球にやさしいエネルギー源（理科・技術）

(5) 知識構成型ジグソー法

過去3年間の実践を通して培った、仲間と対話を通して理解を深めることで、よりよい解へ近づくことができるという学習の風土（文化）をはぐくむために、引き続き知識構成型ジグソー法を実践していく。効果的な場面や教材を、生徒の実態に合わせ、工夫改善する。

V 授業実践

1 1学年実践事例「人を紹介しよう」

本単元では学習したことを活用する発展学習として、これまでに学習してきた語彙や表現、文法事項を生かし、より良い人物紹介のためのポイントを、仲間と対話しながら考え、最終的には自分の考えで紹介文を再構成し、質の高い表現に繋げていく授業実践を試みた。

(1) 主題

My Project 2 人を紹介しよう

(SUNSHINE ENGLISH COURSE 1 開隆堂)

(2) 目標

知識構成型ジグソー法を通して、対話的な学びの中から、人物紹介のプレゼンに向けて考えを深め、聞き手を意識したより質の高いスピーチ表現ができるようにする。

(3) 本実践の目的

いくつかの紹介文から、構成や表現方法を考え、聞き手を意識したより良いスピーチにすることで、コミュニケーション能力の質を上げることをねらいとした。最終的には、聞き手を意識した人物紹介スピーチができるようになることを目標とし、単元計画を立てた（表4）。

表4 単元計画

単元を貫くゴール Big Question 「好きな人を効果的にプレゼンする方法とは？」	
	学習内容及び思考を誘う問いかけ Can-Do
第1時	モデル文の内容確認 「2つの紹介文の良い点は何だろう？」
第2時 (前時)	事前活動：紹介文作成①及びエキスパート活動① 「より良い人物紹介にするには？①」
第3時	エキスパート活動②～クロストーク

(本時)	「より良い人物紹介にするには？②」
第4時 (次時)	事後活動：クロストーク及び紹介文再構成 「紹介文の質をあげよう！」
この後	A L T へのプレゼン 「キーワードを頼りに好きな人物を紹介しよう！」

(4) 実践内容

① Big Question

Big Question 「好きな人を効果的にプレゼンする方法とは？」に対する解を、仲間と話し合い、思考しながら、考えていくために、知識構成型ジグソー法による学習を2時間配当した。

本時の最後に生徒が上記の課題に対して、話せるようになってほしい期待する解は次の通りである。

期待する解：

Hello, everyone. Do you know this nice boy? This is my friend, Ken. He likes baseball and music very much. He is a member of the baseball team. He plays baseball after school. He doesn't play baseball on Monday. Because he has piano lessons on Monday. His favorite singer is Hoshino Gen. Sometimes we sing songs together at karaoke. He is kind, friendly, and serious. I respect him very much. Thank you for listening.

その際、質の高いコミュニケーションのポイント は次の通りである。

Aの要素：

- ①つながりのある10文以上の量で紹介している
 - ②特徴や性格など魅力が伝わる内容である。
 - ③人物に対する自分の気持ちや思いが入っている。
 - ④クラスメイトが聴いても分かりやすい内容である。
- *10文程度の文章で構成しているが、上記の要素がほとんどない場合はB。

② エキスパート活動

より良いスピーチにするための条件（良いポイントや避けた方がいいポイント）を、3～4名の班で話し合い、考えをまとめるという課題に取り組んだ。

エキスパート資料

<エキスパートA>アとイの2つの紹介文を読み、良いスピーチとその理由を考える。
<エキスパートB> ウとエの2つの紹介文を読み、良いスピーチとその理由を考える。
<エキスパートC>オの紹介文の文章訂正を行い、三人称単数現在や人称代名詞の正しい使い方を考える。

エキスパート資料の作成においては、期待する解のAの要素に気づくように工夫した。

③ ジグソー活動

ジグソー活動では、エキスパート活動のグループ

とは違うメンバーで、グループを構成する。エキスパート活動で確認した情報を共有し、より質の高い紹介文にするために、事前に作成した原稿を再構成する。その際に、グループの中の一人の原稿を、グループ全員で再構成することとした。

④ クロストーク

クロストークでは、グループで話し合った、より良い人物紹介の工夫点と再構成したスピーチ案を発表し、クラス全体で交流を行った。各班が考えた Big Question への解を全体で交流することで、課題についての理解を深めた。

クロストーク後には、もう一度、各個人の人物紹介文を見直して、自力で再構成する活動を取り入れた。

⑤ 実践の考察

(ア) 授業前後の変容（ワークシートから）

生徒の事前のスピーチ原稿と、ジグソー活動後の原稿を、ワークシートの記述をもとに比較する。以下は、3名の生徒の変容である。

表5 スピーチ原稿（授業前後）

生徒	授業前後の生徒の記述（原文ママ）
上位生徒	【事前】 Hello, everyone. Look at this picture. This is Moreara Ozu. He belong to the beachsoccer team. He is pro beachsoocer player. He is very tall. He is frindry. I am her fan. I respect him. Thank you for listening.
	【事後】 Hello, everyone. Look at this picture. He is Moreira Ozu. Do you know him? He lives in Japan. He speaks Japanese and English. He is very tall. He's friendly. He is pro beach soccer player. He can play beach soccer very well. He belongs to the Barcelona BS. His free kick is very cool. I respect him. I want to be a good beach soccer player like him. Thank you.
中位生徒	【工夫した点】 ・それぞれのエキスパートの良い点を全て使った。 ・前半に紹介する人の特徴を入れて、後半は <u>彼への思い</u> を書いた。
	【事前】 Hello, everyone. I speak a Momoka. We are a childhood friend. She is a great friend. She love animals. She has a dog. Sometimes she looks after Hachi. Dog name Hachi. Momoka is kind to animals and friends.
	【事後】 Hello, everyone. Do you know this cute girl? She is my childhood friend, Momoka . She loves animals. Do you have any pets? She has a dog.

	Her dog's name Hacchi. Sometimes she looks after Hacchi. She is kind to animals and friends. I like her very much. She is my best friend. 【工夫した点】 彼女の良い所を多く書いた所と、 <u>文章がバラバラにならないようにペットの話を中心に工夫してまとめた。</u>
下位生徒	【事前】 Hi everyone. Look at this picture. This is Pikatyu. He is
	【事後】 Hello, everyone. Do you know this Pokemon? His neme is Pikachu. Pikachu live in the Pokemon world. He is very cute. He is very popular aroud the world. His body cara yellow. I love hem. Thank you for listening. 【工夫した点】 できるだけピカチュウの事を <u>想像できるようにした。</u>

事前活動では、紹介する人物の情報の羅列になりがちな構成が多く、生徒に見られた。また、その人に対する思いまで伝える記述も少なかった。授業後には、評価 B、C の生徒も含め、全員が聞き手を意識した文章構成を工夫した点で挙げている。本授業のねらいでもある「相手のことを考えたコミュニケーション能力」という視点では成果と捉えたい。下位生徒に関しても、文法やスペルミスはあるが、紹介する人物の特徴や魅力を伝えるための表現をしようとする変容が見られ、英語を書く量が増えていた。「期待する解」の実現については、78%の生徒が A 評価であった。ただ、三人称単数現在や人称代名詞に関するミスは全体的にまだあるため、継続的な取り組みが必要である。

以下は、クロストーク後の生徒の感想である。

- ・他のグループが発表していた良い所をどんどん使ってレベルアップしていきたい。聞く側がちゃんと理解できるような文章にしていきたい。
- ・一人ではまとまらなかった文章も、友達のアドバイスをもらって一緒に考え作っていくと楽しくて、思いが詰まったとても良い内容にすることが出来た。
- ・相手に分かりやすく伝えるようにする。she, her, he, his, him に注意する。
- ・ただ紹介するのではなく、自分が思う相手への気持ちもいれて、相手の好きさを伝える。

(イ) 授業デザインの振り返り

事前活動で、1回目に原稿を書いた時のアンケート（選択肢 ABC）では、「人物の特徴を伝える内容が書けていると思う」と 45%の生徒が回答、「相手が理解できる内容や表現で書けていると思う」と 54%の生徒が回答していた。そこで今回、エキスパ

ートの1つに、文法（三人称単数と人称代名詞）を訂正するパーツを加えてみた。今回の授業実践の「聞き手を意識した」というポイントから、相手に分かりやすく伝えるためには、正確性を意識した視点を生徒同士の学びの中に作りたかったからだ。他にも聞き手に「魅力を伝える」という視点で、聞き手の気持ちを引き付けるような内容構成への気づきをエキスパートの切り口として扱った。

事後活動で、再度自力で原稿を再構成した際のアンケートでは、「人物の特徴を伝える内容が書けた」と92%の生徒が回答、「相手が理解できる内容や表現で書けた」と、100%の生徒が回答している。事前のアンケートより、数値が上がっていることから分かるように、事後活動のパフォーマンステストに、自信を持って取り組んでいた。

パフォーマンステストでは、スペルミス等はみられたものの、キーワードを頼りに、その人の特徴や良さなどを中心に構成を考え、さらに自分の思いも加えた、聞き手に内容を「伝えること」を意識したパフォーマンスを心がけていた。今回の実践から、今年度のテーマである「質の高いコミュニケーション能力の育成」において、一定の成果が見られた。

(ウ) 実践を踏まえた授業の改善点

単元を貫いたゴールの設定 Big Question

課題を「自分ごと」として捉え、思考する必然性が高まるものとするためには、問いの設定をどういう切り口で提示すると効果的なのか、全単元、悩みながら設定した。思考を促すような課題の設定についてさらに研究していきたい。今回設定した課題については、事後活動において最終的に自力で効果的な方法を意識して再構成できた点を考えると、妥当だったと言える。

Can-Do リスト

Big Question と連動したものとして設定し、解に向かってスモールステップを積み重ねていく取り組みは、生徒が情報を蓄積し、自分の考えを深めていく様子が見とれた。しかし、常に思考が活性化するように内容にするには、難しさを感じた。内容理解を扱う際に、生徒同士が意見を重ねることができるような目標設定の工夫や、思考がアクティブな状態になるような工夫が、必要である。

言語活動（帯活動）

事後活動でパフォーマンステストを実施した際、ALT からスピーチの内容に関する質問をしてもらった。帯活動として定期的にペアでの Q&A や1分間のフリートークなどで、リアクションやプラス1文での応答を行っていたため、生徒の感想に「質問にしっかり答えることができた」「質問に対してプラス1文を質問の繰り返しにならないように工夫した」などがあった。一方、「質問に返せないことがあった」「分からない単語が出てきたので戸惑った」などの感想も見られた。改善策として、準備や練習などをしていない即興で行うような言語活動を帯活動として充実させていきたい。持っている知識や自分の気持ちを、自分なりの言葉で発信できるような取り組みを、今後も工夫して実践していきたい。

知識構成型ジグソー法

エキスパート活動からクロストークまでの一連の活動において、一人では難しいことも、仲間と一緒に考え、アイディアを共有することで、個々の差が良さに繋がっていることが感じられた。今回は、生徒の思考の見とりをワークシートやアンケートを基に行ったが、学習後の生徒の姿やみとりを明確にした単元デザインについて、さらに研究を深めていきたい。

2 2 学年実践事例「日本文化紹介」

本単元では、日本の伝統文化の1つである「落語」について、実際に英語で語られる落語を見て、外国人に説明する際にキーワードとなりそうな表現を、グループの仲間と対話しながら考え、最終的には英語で伝える活動を行った。

(1) 主題

Program4 Rakugo

(SUNSHINE ENGLISH COURSE 2 開隆堂)

(2) 目標

- ・日本文化でありながら、その理解が十分ではなかったことがらについて、英語を通して理解する。
- ・日本人にとって当たり前の日本文化を英語で表そうとすれば、どのように表現すればよいかを理解し、英語で表現することができる。

(3) 本実践の目的

本単元では、日本文化の発信に、生徒の興味・関心を向けさせ、どのように英語で表現すれば的確に理解してもらえるかを意識した表現活動に、CLILの指導法を取り入れた授業を計画した（表6）。

表6 授業計画

時	学習内容及び活動
これまで	Program4 Eigo Rakugo で、「聞き手が場面を思い描けるような演説をするには？」について考えながら、実際に演じてみる活動を行う。
前時	オリジナル落語作り「海外の人に食べさせたいと思う日本食についてなるべく美味しそうそうに表現することができる」
本時	【本時】「落語の特徴や魅力を英語で伝えよう！」 ①ジグソーリーディング ②ペアでポスター作り（英語での分かりやすい説明を考える）
次時	③発表（多様な「答え」を教室全体で交流する）
この後	現存文化（「もったいない」の使用例など）を外国人に説明するために必要な表現について考える。

(4) 実践内容

① Big Question（以下BQ）

今単元では、単元を貫いたゴールとしての Big Question を「落語が外国人にウケるのはなぜか？」と設定した。本時の問いを、「落語の特徴や魅力を英語で伝えよう！」として、実際に日本人の落語家が、英語で落語を行う映像を見て、落語の魅力や特徴について考え、最終的にはペアでポスターを作成し、発表をするという流れで授業を計画した。

② ジグソーリーディング（4 Corners）

事前の生徒へのアンケート結果から、落語と漫才が入り混じっている意見や、大喜利と勘違いしているものもあったが、テレビや生で落語を見た経験がなくても、感覚として知っている生徒が多いことが分かった。日本の伝統文化ではあるが、あまり馴染みのない落語を、外国人に説明したり、英文にして書く点において、多くの生徒が困難を感じる事が予想された。そこで、ウィキペディアなどから落語に関する英語の説明を集め、中学生用に編集した英文を虫食いにした。教室の壁4か所に貼られた情報を、4人1組のグループで分担して収集し、完成させる。その後全体で答えを確認した。

答えを確認後、グループで「落語を説明する上で、

不可欠なキーワード」を5つ程度選び出させた。

③ BQの視点を持った映像の視聴

「落語が外国人にウケるのはなぜか？」というBQの視点から、英語落語の映像を見せ、メモを取らせた。その後、本時の問いに答えるための話し合いを、グループで行わせた。話し合いの際には、先に考えた「落語を説明する上で、不可欠なキーワード」を用いるように指示した。

④ ペアでのポスター作り

話し合った分析結果をもとに、落語の特徴や魅力を英語で紹介する英文作成を行わせた。作成後には、2人1組のペアで同じ号車の席を周り、他のペアの作品を見て、共感したり、「イイね」と思ったものにハートマークを付ける「ギャラリーウォーク」を行い、お互いの考えを共有させた。

⑤ 実践の考察

(ア) 授業後の変容

ここでは、2ペア（計4名）の生徒を取りあげ、それぞれの生徒の単元前の落語に関するアンケートに書かれていた記述内容と、授業後にどれぐらい本時の課題を意識した英文が書かれたポスターになっていたかをみていく（表7）。アンケートを採る際には、思考ルーチンの1つである『3・2・1ブリッジ』（学習が始まる前からすでに持っている知識を活性化させるために、基本概念を気軽に思い起こさせるために単語を3つ挙げさせ、質問を2つ作ることで少し考えを進ませ、比喩を1つ作ることで、そのトピックを理解しているかを可視化する）を活用し、今回のトピックである「落語」につながる単語、質問、関連事項に焦点を絞らせた。なおアンケートでは、1.落語をテレビで見たことがあるか、2.落語を生で見たことがあるか、3.落語につながる単語を3つ、4.落語についての質問を2つ、5.落語についての比喩を1つ、の5つの項目について回答をさせた。

表7① 落語に関するアンケート記述（事前）

生徒	テレビ	生	単語	質問	比喩
H	×	○	じゅげむ まんじゅう こわい 扇子	①落語はどこで作られたのでしょうか？ ②落語で有名な人とは？	落語はおとぎ話のようである。
M	×	×	古い 時代遅れ おじい	①本当に楽しいの？ ②そもそも落語って何でしょうか？	落語は日本のものである。

S	○	○	正座 ざぶとん せんす	①落語は必ず 扇子を持たない といけない のですか？ ②落語は私服 でもできるの でしょうか？	落語は 世間話 みたいな ものである。
A	○	○	ざぶとん 着物 せんす	①落語はなん でしょう？ ②落語は何 人でやる のでしょうか？	落語は 日本で できた もので ある。

表 7② ワークシートの記述（授業後）

生徒	授業後 *原文ママ
H&M	Rakugo is Japanese traditional culture. It is a enjoyable story. A rakugo specker acts as many characters and try to have audiences understand easily by using voice gesture and sensu. It has a punch line at last and its conclusion is very interesting for Japanese. ⇒キーワードをうまく取り入れながら、自分たちで考えた英文を工夫して特徴を説明している。
S&A	Rakugo is Japanese traditional culture. It features one person portraying many different characters. Sit on a cushion, use only hands and folding fans as tools. Face changing their voice and making different gestures. In the end there is a joke. ⇒キーワードを取り入れながら、自分たちで考えた英文を入れた結果、英文としてのミスが多い。

アンケートの記述の際に用いた思考ツール、『3・2-1 ブリッジ』により、単元に入る前からすでに持っている知識を活性化させた。表 7①から見てわかるとおり、単元前には落語を実際に見たことがなかったり、落語について十分な知識がない生徒が少なからずいた。本時の授業までに、教科書や補助教材の英語落語に触れ、演読やオリジナル落語づくりを通して、落語について学んできた。授業中には、ジグソーリーディングで手に入れた情報を BQ の視点で個人、ペア、グループで精査し、最終的にはペアでポスター作りに取り組んだ。紹介文作成時には、選出されたキーワードを使って英文作成に取りかかったが、キーワードをうまく並び替えたり、キーワードの前後の英文を考えるのに時間がかかり、結果として特徴を伝える程度に留まり、魅力を伝えるには至らないグループが見られた。

（イ）授業デザインの振り返り

ワークシートの評価基準として、「期待する解」を「一人二役を演じること、声や表情を変えること、小道具は使わずに身振り手振りで会話を進めること

などを魅力として伝えながら、ユーモア、共感、笑いは世界共通などの言葉が入っている」と設定した。ワークシートの完成を 2 人（3 人）1 組のペア（× 17 グループ）に行わせた結果、多くのグループが、上記の「期待する解」の中に見られるキーワードを活用して紹介用ポスターを仕上げた。

授業後の感想の中には、「落語の特徴は理解できたけど、英語で説明するのが難しかった」「ウィキペディアの文なしではもっと難しかった」「日本語で説明するのも難しかった」などの意見があり、英文作成に苦労していたことが分かる。

次時の授業にて、全ペアによる ALT へのポスター紹介を行った。黒板に生徒が作成したポスターを掲示し、それを指さしながらの説明を行わせた。説明を終えた後には、ALT からその内容についての質問を 2 つずつしてもらい、生徒たちが答える場面を設定した。多くの生徒が、ジェスチャーを交えながら、ポスターには書かれていない言葉などを補いながら、落語の魅力を伝えようと努力していた。あるグループは、手作り扇子を用いて、実物を示しながら紹介を行い、発表後には、その扇子を ALT にプレゼントしていた。

ポスター作成に取り組ませる設定時間が短い中で、前述のように、うまく英文にして書くことができなかったグループが多く見られたが、発表の段階になると、魅力を伝えるという目的に向かって、自分たちの言葉をつなぎ、なんとかして伝えようとしている姿を見とることができた。

（ウ）実践を踏まえた授業の改善点

授業デザインについて

CLIL の指導法を取り入れた授業として計画した今回の単元における授業デザインでは、CLIL の 4 つの「C」をそれぞれ、以下の場面に取り入れるようにした。まず、英語落語の映像を見せ、課題である「落語が外国人にもウケるのはなぜか？」（Content）をグループ（Community）で考えさせ（Cognition）、話し合わせる（Communication）。今回設定した課題を考えさせるうえで、生徒にもう少し落語について詳しく知っている（日本語でも説明できる）状態にしておく必要があった。英語文化にはない概念を説明することの難しさの理由を考えさせる課題として、「落語は外国人にウケるのか？」という視点で、そ

れぞれの意見を出し合い、「ウケる」「ウケない」の理由をシェアさせることで、もっと深く考えさせることもできると考える。

CLIL 型の授業

CLILは、教科やトピックなどの内容を学びつつ、言語知識や技能などの語学力を高める学習法である。また、CLILの授業は、input(reading, listening)→processing(thinking)→output(speaking, writing)という流れになることが多い。この流れにおいて、今回の単元計画では、input が不十分であった。もっと落語について考え論じ合うためのキーワードや文構造を与えるべきだった。また、事前に宿題として、落語についてネット等で調べさせた情報を元に、グループで話し合わせる時間(processing)を持ち、その後、まとめとして魅力を伝える等のポスター作成(output)を行わせることもできる。

思考を促すアクティブ・ラーニングの授業づくり

前述(イ)の授業デザインの振り返りでも述べたように、生徒自身の解釈や意見が取り入れることができるようにするためにも、内容について深く考えさせる必要がある。生徒の思考を促すことに効果のある課題を設定し、英語でのコミュニケーション活動につながるように、必要に応じて手がかりを与えるなどの足場づくりをしながら、考えさせていく。また他者との「対話」を媒介として、思考を深めることへ結び付けていく。

最後に、評価を工夫(ポートフォリオ、発問による読みの深さの段階的な評価、作問させることによる探求的思考の深さの評価など)することで、生徒の思考の見とりをしていかなければならない。評価を通じて、「できるようになっていく」段階を意識し、インプットがアウトプットのための補足的な足場となるように授業設計することで、CLILによるアプローチを活かしていきたい。

3 3 学年授業実践事例

What is the most important thing to you?

自分にとって大切なものを考え、英語で他の人の考えを聞いたり質問しあうことで、自分の考えを深めさせるという実践を試みた。

(1) 主題

Program7 What is the most important thing to you? (Sunshine English Course3)

(2) 目標

友達の考えを聞いたり質問されることを通して、What is the most important thing to you?に対する自分の考えを深めて表現することができる。

(3) 本実践の目的

既習事項を活用し、お互いの考えを交換する場面を作ることで、生徒のコミュニケーション能力の質を上げることが本実践の目的である。

メインの課題

What is the most important thing to you? に対する考えを深めて表現しよう。

期待する解および生徒の姿は次の通りである。

(期待する生徒の姿)

グループメンバーとのやりとりを参考に自分の考えを深めて表現している。(関心意欲態度 A)

例) 最初: The most important thing to me is my friends. Because my friends make me happy. So they are very important to me.

質問: Who is your best friend? What do you talk with them? What was the best memory with your friends?

最後: The most important thing to me is my friends. When I am sad my friends make me happy. Especially brass band members are very important to me. Because we had a hard practice together. When we had a contest, my friends encouraged me. I want to help my friends too. So they are very important to me.

友だちの意見を聞いたり、相手の考えを広めるような質問をすることで、お互いにより考えを深めることができる。その上でそれらを英語で表現することができるように本実践を行った。

(4) 実践内容

① メインの活動

図2

L1	L2
N	S

図2のように4人グループで、発表者(S)、聞き手(L1,L2)、記録(N)に分かれ、発表者がメインの課題に対する意見を発表する。聞き手は、発表者に対してあいづちを打ちコメントを言う。その後、発表者

の考えが広がるように意識した質問をする。記録は、発表者に対する質問をメモする。役割を変えて、4回繰り返す。

② 取り組みの工夫

(ア) 単元を貫く Big Question(BQ)の設定

”What is the most important thing to you?”に対する自分自身の答えを出すというゴールを意識させて、教科書内容の理解や各活動に取り組ませた。常に BQ を意識させることで BQ に対する答えを思考する材料を集めやすくすることにつながる。

(イ) 帯活動

①のメインの活動で、生徒が即興で質疑応答や意見交換ができるように次のような活動を継続して行ってきた。また相手が話す内容に意識を向け、さらに話題についての考えを深めることにつなげたいと考え取り組ませた。

＋α Q&A ペアでの Q&A 活動で、設定された質問だけでなく相手の答えに対してさらに話題を深める質問をする。

1 分間 Monologue その場で与えられたテーマについて 1 分間パートナーに英語で話す。その際、何語話しているかワードカウンターを利用して語数をパートナーがカウントする。

フリートーク 4人グループであるテーマについてのフリートークの際、質問やリアクションを意識させ会話を繋げる。リアクションの例を手元におき使わせた。

スピーチ 毎時間 1 人の生徒がスピーチを行い、スピーチの中で聞き手への質問を必ず 2 つ以上入れてスピーチに関する内容のやりとりを行う。

(ウ) 単元の流れ

教科書の内容学習後、知識構成型ジグソー法を用いた授業 (H26 年度実践事例) で考えを深めた後に本実践を行った。また本授業後に外国人留学生を迎えて国際交流会を持ち実際に英語で意見交換する機会を設けた。

③ 実践の考察

(ア) 授業前後の変容 (ワークシートから)

事前事後活動

また、事前事後活動として、活動の前後に What is the most important thing? という同じ質問に回答してもらった。ここでは、3 名の生徒を取りあげ、同

じ生徒の授業前と授業後の課題に対する解答がどのように変化したか、具体的な記述を引用しながら示していく (表 8)。

表 8 ワークシートの記述 (授業前後)

生徒	記述内容 (原文ママ)
上位生徒	〈事前〉 The most important thing to me is <u>thinking about other people</u> . Because if people in the world can think about other people, the world may become peaceful.
	〈事後〉 . The most important thing to me is <u>thinking about other people</u> . Because if people in the world can think about other people, the world may become peaceful. I learned children in developing countries hope to change the world. So we should cooperate with them. (工夫した点) ”What do you think about developing countries?” ”What can you do for developing countries?” という質問を受けたので、「他の人」というのを発展途上国の子どものこととつなげて考えた。
中位生徒	〈事前〉 The most important thing to me is <u>a lot of money</u> . Because poor country doesn't have enough living house and electricity so to buy them we need a lot of money.
	〈事後〉 The most important thing to me is <u>a lot of money</u> . Because poor countries doesn't have enough house and electricity. So to buy them we need a lot of money. I think a lot of money can't buy friends. But we can help poor countries and developing countries. Then we can make more friends. (工夫した点) お金で友達を買えないよ！と言われたけど、どうすれば友情を作れるのかも内容に入れてみました。そしたら「お金」って堅いイメージだったけどやわらかなイメージになったかなと思います。
下位生徒	〈事前〉 The most important thing to me is <u>smile</u> . Because smile is good and very nice.
	〈事後〉 The most important thing to me is <u>smile</u> . Because smile is good and very nice. I make smile when I play soccer and watching TV. I like TV program manzai. (工夫した点) どんな時に笑顔になるか具体的に書くことができた。

ほとんどの生徒はグループ活動でグループメンバーから出された質問に答えることで、それまで考えていた意見を膨らませることができていた。また、よく質問されることに関しては、多くの人が知れた

い情報であると考え、事後のライティングで取り入れた生徒も見られた。

(イ) 授業デザインの振り返り

グループで意見を発表後、意見に対して英語で質疑応答することを通して、生徒同士で自分の考えを膨らませることができていたと考える。生徒へのアンケート「グループ活動後、大切なものについての表現をバージョンアップさせることができましたか？」という質問に対しても 100%の生徒が A と答えている(選択肢 ABC)。

相手の考えを聞いた後に、さらに英語で質疑応答をするという点では難しい課題ではあったが、生徒の感想の中に「質問された時に考えて表現できたときは嬉しかった。」「友だちの考えに感心した。」とあり、生徒同士のやりとりを体験させることを通して英語で表現する幅が広がったことは成果と言える。

単元の流れの振り返りとしては、What is the most important thing to you? を意識させながら、まず教科書で世界の子どもの現状や山本敏晴さんの活動を学習し、知識構成型ジグソー法を用いて自分たちができることを考えさせた後、グループ活動で大切なものを表現させることで、子どもたちがより深い内容を表現することができていたと考える。生徒の感想に「今回の課では文法や単語だけでなく、人間としての生き方や考え方も自分なりに考えることができた。大切なものについての討論ではスピーキングの能力も高まったと思う。」とあり、発達段階に応じた生徒の思考を促す教材の大切さを改めて実感した。

また即興で質疑応答ができるように、帯活動で活動を積み重ねてきた成果もグループ活動で発揮できていた。

(ウ) 実践を踏まえた授業の改善点

相手意識を持ったコミュニケーション

生徒同士で英語で質疑応答を行うことを通して、お互いの考えを深めることをねらいとして実践を行い、生徒は健闘していたが、さらにスムーズな英語の運用を求めたい。事後アンケートでも「Listener になった時、アイコンタクトやリアクションをすることができましたか? A91% B9% C0%」「Speaker の考えを広げたり深めようと考えて質問しました

か? A94% B6% C0%」とあり、よい聞き手になるうとしていた姿勢が伺える。一方、「Listener になった時、グループメンバーに積極的に質問できましたか? A88% B12% C0%」とあり、少し英語で質問することには自信のなさが見られた。

生徒の感想に「良い Listener になるのは難しかったけど、いい Listenerのおかげで自分の意見を深められた。」「聞きたいことを英語にして聞くのが難しかった。」というものがあつた。生徒の活動の様子やアンケートの結果からも、相手の意見に対してどのような質問をしたら良いかという思考と英語での表現を同時にさせることはスムーズにはいかなかった。

継続して簡単に答えが出せない深いテーマについて考えさせる活動と即興で表現させる活動を継続する必要がある。特に英語が苦手な生徒もグループメンバーと助け合って英語運用能力を高めていけるようにしたい。

また、知識構成型ジグソー法のようにグループで話をしながら答えを出していく活動や新たな疑問が出てくる活動が他にないか模索していきたい。

今回、主にワークシートとアンケートを使って生徒の思考のみとりを行ったが、さらにより見取りの方法についても考えていきたい。

VI 成果と課題

1 成果

質の高いコミュニケーション能力の育成を目指し、アクティブ・ラーニングを取り入れた授業実践をしてきた。

その際、知識構成型ジグソー法だけでなく、ペアやグループでのスピーキング活動やライティング活動などのアウトプットを組み合わせ、日々の授業でコミュニケーション活動の充実を図り、表現力や正確な運用能力も身につけさせたいと考え、取り組んできた。

1 学年での「聞き手に内容を「伝えること」を意識したパフォーマンスを心がけていた」や、2 学年での「キーワードとなる言葉や文をつなぎなら、相手を意識して、落語の特徴や魅力を伝えようと、目的をもって英文作成を行わせることができた」、3 学年の「即興で質疑応答ができるように、帯活動でス

ピーキング活動を積み重ねてきた成果もグループ活動で発揮できていた」という記述から、質の高いコミュニケーション能力の育成にせまった成果の一つとしてあげておきたい。

特に、単元を貫くゴールの設定として **Big Question** と、それと連動した **Can-Do** リストの取り組みは、思考を深めていく上で効果的だったと感じる。アウトプットをする時になって、突然、課題を投げかけるのではなく、一時間毎に **Big Question** に向けて、足場づくりをし、問いに対する答えを常に思考し、時には他者と対話しながら、さらに思考を深めていくことができた。単元の最初で、目的や焦点を明確にし、様々なアプローチで思考を促すことで、質の高いアウトプットが期待でき、質の高いコミュニケーション能力へとつながる、と考える。

2 課題

自分の思いや考えを、自分の言葉で論理的に相手に伝えるには、日頃から自分なりに解釈して話したりする活動や、教科横断的に実生活に結びついた内容について表現する活動を多くする必要がある。学んだことを必要に応じて引っ張り出して使うことが出来るように、良質なインプットだけでなく、スムーズなアウトプットと連動させることが大切だと言える。

生徒の思考を促す効果のある課題の設定の大切さを改めて感じた。問いが難しすぎず、簡単すぎず、「考えたくなる」状況や「深く思考する必然性」をどう創っていくのか、今後も継続して研究していきたい。

また、帯活動（言語活動）においても工夫改善が必要である。簡単なトピックだけでなく、深いテーマに関しても、考えをまとめ自分の言葉で、しかも即興で表現させることを継続する必要がある。「思考を深める」活動と「英語でのコミュニケーション」活動をバランスよく組み合わせることで、より質の高いコミュニケーション能力の育成に繋がると考える。

生徒の思考の活性化の点では、教科横断的な活動として **CLIL** 型の授業も有効だと考える。実生活につながる内容を英語で考えるという学習過程を他教科の知識を活用することで、アウトプットに向けて

深く考える機会になるだろう。プログラムの内容に軽重をつけるなどの工夫をする必要はあるが、実生活に結びついたことを表現できるような活動を模索していきたい。

さらに今後は、小学校外国語活動で学んできた表現と中学校で新しく学ぶ表現とがスパイラルに重なり合い、しっかりとした土台を築きながら、学習が進められるような9年間を見通したカリキュラムも必要だと感じる。小学校外国語活動及び外国語科と連携したカリキュラムを考えるということは、子どもたちに小学校英語活動で培ってきた積極的な意欲や態度を維持させることにつながり、ひいては子どもたちの質の高いコミュニケーション能力の育成に結びつくと考える。

引用文献・参考文献

- (1)琉球大学教育学部附属中学校『研究紀要』第28集、2016年、p.184
- (2)教育課程部会外国語ワーキンググループ「小・中・高等学校を通じた外国語教育のイメージ(案)」(平成28年4月26日)
- (3)石井英真『今求められる学力と学びとは』、日本標準、2015年、p.6
- (4)山本崇雄『アクティブ・ラーニング英語授業』、学陽書房、2015年、p.25
- (5)前掲(3)、p.36
- (6)前掲(3)、p.14
- (7)卯城祐司「CAN-DO リストの考え方と生かし方」『英語教育』(平成26年12月15日) Vol. 67-1 p.11～14
- ・中教審教育課程特別部会「論点整理」(平成27年8月26日) p.17～19
- ・上山晋平『英語教師のためのアクティブ・ラーニングガイドブック』、明治図書、2016年
- ・池田真「21世紀のグローバル英語教育：CLIL（内容言語統合型学習）の理念と方法」『全英連会誌』2015年53号
- ・「上智大学の実践」池田真 2014-3、p.63
- ・教育課程部会教育課程企画特別部会外国語ワーキンググループ（案）(平成28年6月28日)